くから示していた。 きんでて新鮮な作品を制作してその才腕と自然主義的な方向性を早 の卒業制作に「田舎嫁入」と題する題材、 漫画風の軽い作を多く出品するようになって行ったのに対して生真 学んだ円山派写生画法から脱却して行った。中でも百穂は、 科を卒業したのちさらに西洋画科に入ってデッサンを学び、 のである。 に小坂象堂があったが、无声会はさらにそれを発展させようとし れて日本画の旧套を打破することであった(「无声会かたろぐ序」 大村 白な態度で写生の研究につとめ、率直に対象を描いた。 日本画革新の道をこうした方向に向けて切り開こうとした人 会の中心となったのは素明と百穂で、 空間表現、 彼らは本校日本画 筆法ともに抜 彼は本校 素明が 玉章に

的に非難する一方で无声会や彫塑会の自然主義ないし写生主義を称 は日本美術院の横山大観、 十四年卒業)の強力な支持もあって暫く盛況を続けた。 が次第に不明瞭になり、 六回展(明治三十五、 无声会は大村西崖や平子鐸嶺 新聞紙上に盛んな論評を展開した。 六年)を過ぎた頃になると、 活動も下火となった。 菱田春草らのいわゆる朦朧体画風を徹底 (日本画科より西洋画科へ転科し明治 しかし、 その自然主義の旗幟 无声会は第 この頃、 西崖 五

11 学生生活

図案科想ひ出

小

場

恒

吉

争

舍の中學を出た許りで西も東も判らない。 予の美校に入學したのは明治三十一年の九月だつたと思ふ。 況して圖案科などいふ 田

> され、 があつた様に上級生等には猶袍服登校者が多く、 の鎮靜直後であり、 掛けそこに何となく美校といふ特異性の趣を表示して居た。 を羨ませたものである。 になつた時であつたので、恰も維新の際廢刀令が出ても刀に未練 命された女高師校長高嶺秀夫氏の兼務であつた。 あつた。 は定員に滿たなかつたものか、 存在を知る由もなく、真直ぐに日本畫科を志願した。 山水か何んかの新案をかっされ、 此時の校長は岡倉 冠袍の制服が廢され今日の様な平凡な洋服制 諸先生は几帳の紫紐を肩から斜に腋下に 〔覚三〕校長の後を受けて彌縫的に任 出願期限後であつたに拘らず受理 夫れが無事通過したので 有名な美校騒動 却て我々新入生 當時應募者

た。 榲邨· るが、 當然であつて、人々のよく知る所である。 するの親みがあつた。されば其門方より諸大家の輩出したことは 非凡、教官生徒を打つて一丸とし、互に心服し合つて生死を共に つて居た。 氏であり、 予は直接岡倉校長を知らないが、當時高等工業學校長は手島精 明治三十一年當時にも猶そのなごりとして、黑川眞賴・小杉 學科の方にも一流の學者を招聘して教壇に立た 森鷗外・本田種竹・今泉雄作等の諸先生が居残つて居られ 岡倉校長の美術學校に對する泡負經綸は、 藏前に手島、上野に岡倉ありと學界の雙壁として光 實技の教官は勿論であ せら 熱烈にして n た

或生徒がそれを一口失敬したら砂糖水であつたといふ 笑話 もあ て特に奈良朝の歴史は出色のものであつた。 黑川先生は日本歴史の老大家であり、 いて時々飲んで居られたので、 一同を不思議がらせてゐたが 兼々藝術史の權威者とし いつも机上に薬瓶

變つて審美綱領 好評なのは言ふまでもないが、 小嶋憲之・森鷗外・本田種竹の三先生がある。鷗外先生の美學の 途から落伍する人も少なくなかつた。 つて、學生からは敬畏されそれがため圖畫教員志望をしても、 つであつて、用器畫といふよりも寧ろ嚴密なる製圖の練習であ (の部に其名を逸して居るが、美校として忘れてはならぬ存在に た。言辭謹嚴諄々として書道史を說かれた。美術學校 小杉先生また屈指の國文學者で、 を講義された。小嶋先生の用器畫法は最も特色ある學科の 「森鷗外・大村西崖共編。 予の時からは大村 [西崖] 故實に通じ能書の譽れが高 明治三十二年六月。 一覽舊職 中

本田種竹先生は支那歴史を擔當され、綱鑑易知錄を 教 授 された。教科書としては大部のものであり纔に卷初の二・三十枚より位は槐南・青崖と鼎峙すと稱せられ、その南都懷古十二律の如きは、假りにも奈良美術を談ずる人ならば、口吟に値する絕唱である。其他支那の繪畫史や書畫骨董にも通達して居られた。その令る。其他支那の繪畫史や書書骨董にも通達して居られた。その令る。其他支那の繪畫史や書書骨董にも通達して居られた。その令は、假りにも奈良美術を談ずる人ならば、口吟に値する経過である。

に「ソノ今ノ」の言葉を連發されるので、それが綽名の樣になつ識とともに、聽者倦むことを知らない名講義であつた。一句ごとけ、椅子に端座して日本美術史を口述された。懸河の辯は其の博は實に萬能であつた。圖案科長であり綠色の羽織に紫 の 紐 を 掛け

此の様な人は不世出であらう。學校を辭されてから帝室博物館 眞の博士とは斯かる達人をいふべきであつて、今後とも恐らくは 無かつた。 從つて圖案の見識は、 底出來ない藝當である。 の衰微して職業化した今日として極めて有意義のことの様に思 くとも、その墳墓や肖像はた筆蹟等を誌上に掲げることは、 かけたものである。 木〔直彦〕校長も屢々其門を訪はれ、我々もよく教を乞ふべく出 工藝部長として重きをなし、 の住職になり得る有資格者であつた。予も多くの先生に就いたが 素人の域を脱し、藝道一として可ならざるなく、佛學も優に一寺 り、又茶に華に表装に造詣深く、書は光悦、 ものがあり、徒らに新奇を競ふ外國向きの濱物などは全く眼中に を持つて居られたのみならず、日本圖案法の創始者とも云ふべく のと違つて殆ど白紙であつた。 未だ今泉先生の様な偉い物識りに接したことがない。博士以上の 他の先生の様にノート かねて有職故實に明かに、書畫骨董の鑑定は 五十周年に當り諸先生の墓參とまでは行かな 高尙にして優美であり他人の追從を許さぬ 先生は獨り日本美術史に精通獨自の見解 時々美校で科外講義を催された。 博學多才にして自信がなければ到 を睨んで、 鸚鵡の様な講義をする 畫は墨繪、 詩歌また 神に 正

生・新案等を交互に課し、時には御手本をも描いてくれられた。草〔神来〕・嶋田〔友春〕等の助教授も居られ、臨畫・模寫・寫室の一隅に割據し、其流派々々を教授された。本田〔天城〕・天室の一隅に割據し、其流派々々を教授された。本田〔天城〕・天室の一隅に割據し、其流派々々を教授された。本田〔天城〕・天室の一隅に割據し、其流派々々を教授された。疊敷の廣い教室が處々に予は最初豫科の日本畫科に這入つた。疊敷の廣い教室が處々に

れる。

タイプになつて居らず、 教室の元氣を養ひ勉強努力したもので、 生 當時世間は豐富なる飲食店によつて滿たされて居なかつたので學 つて便利なところもあると云ふて居られたことを記憶して居る。 暫く經過してから座席を廢し洋畫風の畫架を立てゝ揮毫され、 製作を揮毫され、 殊に有益であつたことは、大家先生は各々其席に於いて依賴 一の嗜好物は、燒芋と團子に限られこの二つに依つて、 生徒の眼前に於いて實演されたことであつた。 何となく私塾風のところがあり、 今日の様に整備し 稀れには 文庫も た學生 畫 却

なり有効に役立つた。

先生は階下疊敷の室に大きな低い机を前に端座され、 十二年組が卒業された直後であつて、 の会計課し 櫻樹の林間に孤立して居た。 らうとしたのではなかつた。 あつて、 などを讀んで居られた。 友春先生、 壷などの題を出され、 予は本科一年の時に圖案科に轉じた。 .また我々の乞に應じて此の机を中心に陶磁や佛教美術などの講 用は自由であつた。 三年四年は各一人、先生といふても今泉先生と助教授の嶋田 圖案の參考圖書や卷物類は全部、 河邊 種々教訓を受けたかつたからのことで、 助手の高屋肖哲先生位のもので頗る寂しかつた。 のある邊の位置であつたと思ふ。 [正夫]・小檜山 それで紛失する様な危険もなかつた。 其都度批評教授されたことを記 憶 織物・帶地・浴衣・笠翁飾硯箱・七寳飾 丁度今の會計課〔大正三年落成 當時の圖案科教室は木造二階建で、 [右近] などいふ秀才の多かつた三 生徒といふても 一年 科へ持つて來てあるの それは今泉先生の膝下に 此の時 敢て圖案家にな は 源氏湖月 千 頭 今泉 は一 て で其 本館

ず、

建

義もされた。

生の門下生になつたが、 武田先生を罵倒して居たものである。今や此の三人とも已に鬼籍 孔をあけて行く。 裝飾を描いて居ると、 あ若い者はあんなものだと齒牙にかけられなかつた。獨り大槻 組として頗る鼻息のあらい覇氣に富んだ人で、今泉先生に挨拶さ 終ることになった。 に進む様になつたが、 は武田先生からギュウ~~いぢめられたもんだ。折角日本畫 れたことは一度もなかつた。 もまた一人で武田 せざるを得ない。予もまた面白半分に武田先生の用器畫法と西洋 に入つたことを思へば、 《垢面の長措大平子鐸鈴氏がのそりと遊びにこられ、二人でよく 短あり、 、築史とを聽講したのがもとになつて、 工藝の方また同様で依然志望は日本畫にあつたから、 一階は建築裝飾の教室で生徒としては大槻才吉君唯一人、 勝敗は預りといふ處であつた。そこへぼろ袴を着け蓬 まるで毛筆とコンパスの喧嘩の様なもので一 [五一] といふ新進工學士であり、 先生は遠慮もなく消されコンパスで大きな 無論建築家にならうなどとは思ふても居 それも上達の見込みなく一生不得要領に 吾が身も中古る以上になつたことを慨嘆 先生は少しも氣を惡くもされず、 自然の間に建築装飾の方 恩賜の時 寛畝先 先生 ま

頭

以て、 合によつて實現されず、 鳥渡面白い變遷史をもつて居る。 い 五年制の建築装飾を設置して、 此 の圖案科の建築装飾部は即ち今日の建築科の前身であつて、 多くの貴重なる装飾關係の洋畫を將來されたが、 後圖案科の中に同居潛在し、 大學に對抗させようとの抱負を 元來岡倉校長は美校にふさは 雙方の間に 經費 0

は

の、岡倉先生も地下で苦笑して居られることだらう。の然も五年制といふ長い類のない建築科が獨立したのであるか校の然も五年制といふ長い類のない建築科が獨立したのであるかをの然も五年制といふ長い類のない建築科が獨立したのであるか校の然も五年制といふ長い類のない建築科が獨立したのであるから、岡倉先生も地下で苦笑して居られることだらう。

なる何物かのあらんことを期待し、 れるといふので、 生が歸朝され 〔明治三十五年一月〕、 それが 圖案科の なりの大家の前には無條件に頭がさがる。 正に其適例である。 で、 案科出身者には昔の相阿彌・光悦・遠州・光琳の様な大家に乏し 和七年和田英作氏が校長となるや辭職を餘儀なくされた。 實に三十年間の長きに亘り、 三十五年四月には日本畫科出身の嶋田佳矣先生が、高等工業學校 古 を辭され美校圖案科長の椅子につかれ、 も東の方に移り、 T. 澤田 少し志のある人は作家に轉向しようといふ傾向を 多分 に 且つ

圖案

その

もの

も縁の

下の

力持

に終

始する

様な
嫌がある

の 校長に陳情したり、 ||藝圖案の方では明治三十三年に澤田 兩君が入學されてから以後は、年々志願者も多くなり教室 一誠 郎 建築裝飾部には大澤〔三之助〕先生がこられ 全生徒の歡迎となり、 從つて圖案科出身の多くは洋畫なり、 富本 岡田先生を新堀の僑居に訪問 [憲吉] ・ 母校の後進子弟を教育されたが、 早速一部の生 廣川 そこに新鮮なる西洋圖案 鋭意其職に盡され、 〔誠一郎〕・十二町 此頃丁度岡田三郎助先 [松五郎] の三君など 一徒 は 教官となら した 正 木 日本畫 由來圖 b 爾後 百 0 有 昭

> 岡田 か で彩色に長じて居られた。夙に奈良に遊んで古彫刻を研究され、 装飾部の諸先生は玆に言ふまでもなく、 りであり、 製作〔「俱楽部建築図案」本学芸術資料館蔵〕 河邊[正夫]・千頭 移轉した。 集めて居られた。 になりて、 かく、 だ。 々熱心なる指導振りを發揮された。 純なる藝術家であつた。從つて待望した圖案科の改良も有耶無耶 又専門以外の仕事にまで手を出される様な野心家でもなく、 も洋畫家であつて圖案家ではない。越味嗜好の上の圖案ならとも 應接せられたことを今に記憶して居る。 ねて工藝品の品評に秀でられ江戸ッ子風であり、 洪君などは特にその眷顧を受けた。 教授振りは、 大澤先生は美校とともに終始された長者であり、予の同學森 此時先生は押入れ改造のベットから徐ろにぬけ出てこら 信 全般的に亘つて日本特色のある圖案の解され樣筈はない。 郎、 千頭先生また圖案に對する天才の持主であつた。 此の前後を通じて敍上の先生以外に工藝圖案の方には 豫期に反することになつたが、 長く圖案科の心服する處となつて、 彫刻には竹内〔久一〕 斯くて明治四十二年に新校舎即ち今日の教室 [庸哉] 建築装飾の方には大澤・古字田 河邊先生は伎倆卓絕其の卒業 竹内久一先生は木彫の大家 等の諸先生が居られ、 定評のある人々で 併し先生はいくら大家で 先生の溫厚博愛な洋書 の如きは 敬服の よく比喩警句 人望を一身に [実]・ あ 建 詢に 夫 る 至

(『東京美術学校校友会誌』第十九号。昭和十五年十月)

により人を誘導された。

「下略」